

Ⅲ 総括

(全体を通しての優れた点、改善を要する点等について 2,000 字以内で記載してください。)

本学は 124 年の長い歴史と伝統に培われ、薬系の大学として高い社会的評価を得ているものと自負している。中でも学術（創薬科学）フロンティアセンター(1999 年)、ハイテク・リサーチ・センター(2001 年)、社会連携研究推進(産学連携事業、バイオベンチャー:2002 年)とオープン・リサーチ・センター(2004 年)の 4 つの学術研究高度化推進事業が認可され、さらに 2004 年 7 月には 21 世紀 COE プログラム「伝承からプロテオームまでの統合創薬の開拓」が採択されたことは、研究教育拠点として創薬研究の高さが評価されたものと推察される。とくに 21 世紀 COE プログラムは薬学部単独としては東大、東北大学と本学の 3 大学しか採択されなかったことは、本学に対する高い評価を裏付けているものと考えている。一方、薬学 6 年制がスタートした 4 年目の現在、医療チームの一員として活躍できる薬剤師の養成という社会的な要請に応えるために、本学の薬学教育や教員組織なども大きな変革期の途上にある。

また、本学の将来問題の検討は財政問題を抜きにしては不可能で、薬学部の受験者が年々減少する中、授業料の値上げは困難な状況になっており、また手数料収入が伸びないなど、収入の伸びが期待できない。一方、6 年制薬学教育の 5 ヶ月間の実務実習に対する費用が、まだ最終決定されていないものかなり高額になることが予想されており、これらの費用も本学では授業料で支払う予定である。このような状況に対応するために、本学では理事会と教員による教学部会の協力の下に中期計画策定委員会が立ち上げられ、平成 19 年度に中期計画である「躬行プラン」が策定された。現在、この「躬行プラン」に従って、教育・研究や財政面の問題点を解決すべく、逐次実行している。以下に本学の優れた点や改善を要する点について主だった項目について記載する。

- ① 1 次生で約 10 名の小グループの学生に実施されている基礎演習では、学生自らが調べ、纏め、発表し、少人数でグループ討論を行っており、問題発見能力、問題解決能力、発表能力、討論能力やコンピューター操作能力を養成するのに役立っている。さらに、3 年次の後期から実施している卒論実習・演習では、学生が希望する分野に 4 年制では約 1 年、6 年制では約 2 年半配属され、教員や大学院学生の指導を受けており、専門知識の修得のみならず、学生の人間形成に大いに役立っているものと思われる。医療チームの一員として活躍できる人材を育成するために、6 年制の一部の学生に京都府立医科大学や滋賀医科大学の医局などに約 1 年間派遣し、指導を受けるシステムを来年度から開始すべく準備を進めている。

- ② 共用試験の CBT は、第二の国家試験にならないようにとの事であったが、模擬試験や体験受験の結果で、組織だった取組みが必要であることを痛感した。したがって、本学では当初予定していた対策を全面的に改めて対応している。また、OSCE 実施時に今後のことも考えて、地域住民にも呼びかけて約 40 名の模擬患者 (SP) を養成すべく準備を進めているが、現在約 30 名の応募があるものの、さらなる募集活動を継続している。
- ③ 実務実習の指導教員としては、本年度にはさらに 3 名の実務家資格を有する教員を採用する計画で準備を進めている。また、実務実習に関しては、調整機構のご努力により実習施設は決定されたが、実習費用に関しては現在、交渉を進めているところである。しかし、相当困難を伴うことが予想される。
- ④ 国家試験に対する対応としては、薬学教育研究センターがその教育を担ってきたが、6 年制や CBT に対応するために、新たな教員を募集し、指導にあたる教員の補充を計画的に進めている。
- ⑤ 新たな分野の新設：薬学 6 年制導入に伴い、本学でも専門薬剤師養成のために 6 年次の前期に多くの講義を開講するが、現在の教員では対応が困難である「ガン治療専門の分野」を医学部との連携で平成 20 年度に新設した。また、生命科学の領域は今後も重要な領域で、再構築する必要があると考えており、今後、新たな生命科学の分野を新設する計画で検討を進めている。